

380 線維性骨異形成 (fibrous dysplasia)

の骨シンチグラム所見

奥山武雄、鈴木 均、桑原雄二、中元和也、
藤井張生、鈴木宗治（東医歯大、放）

骨シンチの鑑別診断学的効用を探求するために、良性骨腫瘍についての検討を重ねて来た。今回は1982年3月末までに骨シンチが施行された良性骨腫瘍（骨腫瘍性疾患を含む）100例の中で14例を占める線維性骨異形成（FD）についてのべる。

14例中9例が単骨性、5例が多骨性であった。病巣部の放射能集積を軽度、中等度、高度の3段階で標示すると、FDは単骨性、多骨性あるいは発生部位のいかんを問わず高度異常集積を示すと共に放射能分布が均等で辺縁が鮮明であった。良性骨腫瘍全100例の分析において、このFDのシンチパターンは特異的といい得る所見であった。FDは20歳までに好発する疾患であり、骨シンチは多骨性病巣の存在診断のみならず、小児の骨透亮像の鑑別に重要な情報となることを知った。14例の他に下頬骨腫瘍で“線維性骨性病巣”と組織診断されている症例が2例あるが、X線像ならびにシンチ所見からFDと同じ概念の疾患と考えられた。